

校長室だより

No. 29

平成 29 年 11 月 24 日(金)

強く やさしく

六ツ美中部小学校校長

か とう よし かず
加 藤 嘉 一

「よむちょ」の結果報告 -読書カードは家庭読書の一助となったか-

校長室だより No.25 (10 月 27 日号) でお知らせしたとおり、家庭での読書習慣をつけるために、もみじ読書週間 (11 月 2 日(木)~15 日(水)) に読書カード「よむちょ」を使って、子供たちに読書記録 (時間) を記録してもらいました。各御家庭でのお子さんの読書の様子は、いかがだったでしょうか。

学校では、今年も図書委員会が集会を開き、お勧めの本を紹介したり、友達への読書紹介をする取り組みをしたり、本の世界に誘う掲示を作成してきました。るるの会の皆さんも、毎月すてきな読み聞かせをしてくれています。子供たちになんとか読書の魅力を感じてほしいもの。

今回全校児童の読書時間を、すべてコンピューターに入力しました。入力していくと、様々なことが見えた気がしました。結果は以下のようでした。

今回一番よく読書をして
いたのが 5 年生です。

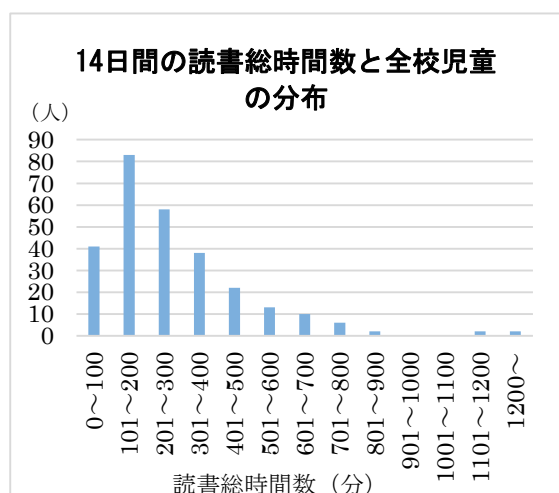
	1年	2年	3年	4年	5年	6年
学年1日平均(分)	13.0	14.9	21.4	22.6	24.9	19.8
最長者1日平均(分)	34.3	47.5	145.7	63.6	85.6	39.1

1 日平均約 25 分。読書は

個別のものですから、一人一人のデータも気になりました。1 年生でいうと 2 週間の合計で最長 480 分 (1 日平均 34.3 分) 読書した子がいました。好きな子は、1 年生でも毎日 30 分以上も読んでいられるのだと分かりました。3 年生以上になると、1 日 1 時間以上読んでいた子が何人もいます。全校で一番は、3 年生で

最長 1 日平均 145.7 分、つまり約 2 時間 25 分読書しています。すごい。一方で、平日 0 分の子供が何人かいました。記録を打ちながら少しさみしくなりましたが、「忙しい毎日を過ごしているのかな」と心配にもなりました。

さらに、結果をグラフにしてみました。分布は、左の通りです。



もう一度校長室だより No.25 (10 月 27 日号) で掲載した、全国学力・学習

【「よむちょ」の児童の感想より】

よむちょをはじめてから、いつもよりも本を読むようになりました。ほかに、いろいろな本を読んだりしました。もっとやりたいと思いました。読んだ本の中で一番読んだのは「〇〇〇〇」です。(5 年)

状況調査の結果（下表参照）を見てみると、平日に平均 30 分以上読めるとよいことを感じます。今回の結果では、一番よく読んでいた 5 年生で 1 日平均 24.9 分ですから、一人あと 5 分読めるとよいでしょうか。平日にあまり読めなかった子は、読む楽しさを知り、習慣を身に付けられるとよいですね。わたしも毎日 30 分以上読んでいるかと振り返ると、自信のない日が多いです。がんばらなくては。

	学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書をしますか（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）	児童数	児童数の割合（%）	平均正答率（%）			
				国語A	国語B	算数A	算数B
1	2時間以上	69,935	8.9	77.5	82.1	79.5	48.7
2	1時間以上、2時間より少ない	100,437	10.0	78.2	82.5	80.9	49.5
3	30分以上、1時間より少ない	199,283	19.7	77.8	81.5	81.3	49.4
4	10分以上、30分より少ない	270,829	28.8	76.4	59.2	80.5	47.8
5	10分より少ない	161,756	16.0	72.6	54.3	77.0	43.6
6	全くしない	205,190	20.3	70.0	50.8	74.3	40.6

ちなみに岡崎市の先生たちのなかで、毎月自分の専門外の新刊（初版）の本を読んで読書メモを書く研修を続けている方々がいます。小田先生は、そのお一人です。小田先生が書かれた最近の読書メモが、読書とはどういうものか、読書の魅力を伝えているように思いました。御本人に掲載を許可していただきましたので、以下に紹介します。

「小田先生の読書の記録」

- 書名 十歳までに読んだ本
- 著者 西加奈子ほか全70名
- 発行所 ポプラ社 本体価格 1,600 円
- 心に残る言葉

九歳の頃、この本と一度目の出会いを果たしたことは、私の財産だ。これから何度も、私はこの本を読むたび、昔、自分がどうだったか、今の自分がどうであるか、その時々自分の現実と対面できる。（辻村深月氏のエッセイより）

■著者について

著者の一人である辻村深月氏は、1980年、山梨県生まれの小説家。思春期の若者の揺れ動く感情と微妙な心理をリアルに描くことに定評がある。著書に、デビュー作「冷たい校舎の時は止まる」、直木賞受賞作「鍵のない夢を見る」がある。

■書評

書店の絵本コーナーのポップを見た。「究極の恋愛小説」と書いてある。そこに、佐野洋子さんの絵本「100万回生きたねこ」があった。2年前に学芸会で取り組んだお話。四十年前発行の名作だ。

以前手にした本を読んで、前と何か違うと感ずることがある。本は変わるはずもない。でも何か違うと感ずる。それは、自分が変わったから。年を重ねただけ、経験が増え、境遇も変わる。違う自分が読むのであるから、読みが変わるのは必然だ。

本著には、小さい頃に読んだ本の記憶をたどったエピソードが記されている。そこには、単に懐かしむだけでなく、本との再会を通して生き方を振り返る著者の姿があった。著者の一人、辻村深月氏は、「その時々自分の現実と対面」と表現しているが、自分の現実がまさに読みに反映されるのだ。

私は、昔、「100万回生きたねこ」を読んだとき、「家族愛」と読んだ。今は、「生きる意味」と読む。自分の中にも、いくつかの「100万回生きたねこ」がある。私も、本を通して昔の自分を見た。